

序

池内 恵

国際日本文化研究センター

本報告書は、2006年11月5日・6日にカイロ大学文学部と共催で、日文研海外シンポジウムとして行われた「日本研究カイロ会議」の成果を公にするものである。海外シンポジウムは日文研の行う研究事業の一つの重要な柱として行われてきた。1995年に第1回が中国の北京大学との共催で行われて以来、トルコのイスラム社会科学芸術学院(1996年)、イギリスのシェフィールド大学(1997年)、ベルギーのルーヴァン・カトリック大学(1998年)、オランダのライデン大学(1999年)、アメリカのハワイ・マノア大学(2000年)、カリフォルニア大学サンタ・バーバラ校及びカリフォルニア大学ロサンゼルス校(2001年)、プリンストン大学(2002年)、カナダのカルガリー大学(2002年)、オーストラリアのシドニー大学(2003年)、シンガポール国立大学(2004年)、香港中文大学(2005年)とそれぞれ共催で、毎年行ってきた。

2006年にエジプトのカイロで海外シンポジウムを開催するに際しては、独自の意義を意図していた。これらの開催地・共催校を見てわかるように、これまでは北米や東アジアを中心とした、日本との文化的・政治的・経済的関係の密な環太平洋諸国との共催が多く、それと並行して、日本研究の蓄積のある西欧とも共催の実績を積み重ねてきた。そこで欠けていたのは、地理的にはラテン・アメリカ諸国、ロシアと旧ソ連諸国、そしてアラブ諸国を中心とする中東・アフリカ諸国であった。その欠落を埋める最初の試みとして、2006年はエジプトでの開催が計画された。これまでの開催地では日本研究の制度的な基盤がかなり充実していたが、アラブ諸国では日本研究は各国の教育・研究体制の中で十分な地位を与えられているといい難い。その中でエジプトのカイロ大学文学部は、1974年に日本語学科を開設しエジプト人の教員を養成し得ている。アラブ諸国での日本研究の原状での最高水準を測り、今後の研究の発展を刺激するためには、カイロ大学文学部との共催は異論のない選択肢であった。

共催校の位置する地域における日本研究の現段階の成果を明らかにするという趣旨から、共通テーマは厳密に絞り込まず、「日本研究カイロ会議」という緩やかな枠組みを設定した。エジプトを中心に、アラブ諸国での日本研究者を広く結集し、これまでの研究を披露する場として機能することを意図したのである。また、日本からは日文研内外の多様な関心と専門分野の研究者を招聘して渡航し、日本研究の現状をカイロ大学やエジプトの日本研究者に伝えることも、同時に意図していた。エジプト・アラブ側からも日本側からも、いわば「参加し、発表することに意義がある」という点を打ち出した会議であった。

結果として、「日本研究カイロ会議」は、意図された目的と趣旨について、成功であっ

たと評価することができる。まず何よりも、エジプトとアラブ諸国の日本研究を主導してきたカイロ大学文学部の多くの研究者が一堂に会し、研究発表を行ってそれぞれの能力と成果を示したことに大きな意義がある。そして、準備の段階でも、会議当日にも、カイロ大学及び文学部を挙げての支援が寄せられたことは、今後のエジプト及びアラブ諸国での日本研究の発展にとって大きな意義がある。アリー・アブドッラフマーン・カイロ大学学長はカイロ大学が研究大会をホストし、共催することを受け入れ、その指導力によって準備を強く後押ししていただき、多忙の中、研究大会初日の開会式に出席しスピーチも行った。アフマド・アブダッラー・ザード・カイロ大学文学部長は事前準備のために来日して日文研を訪問し、当日も開会式での挨拶を行うだけでなく、セッションでも積極的に議論に参加された。日本研究の意義についてカイロ大学や文学部全体から強い支援のメッセージが届けられたことは、カイロ大学文学部日本語学科にとってだけでなく、エジプトの日本研究全体にとって大きな意味を持つ。この機運を、カイロ側も日本側も生かして、アラブ世界における日本研究の発展へとつなげていきたい。

ここで会議の各セッションの報告者と報告内容を大まかに紹介しておくことが適当だろう（プログラムは本報告書9-12ページに掲載してある）。2日間にわたった会議の全体は5セッションによって構成され、11月5日に第1から第3セッションが、11月6日に第4・第5セッションが行われた。第1セッションは **Japan and the Arab World: Comparative Studies in Civilizations** と題され、日本とアラブ世界を「文明」という観点から論じる、巨視的な議論が、方法論からも、対象とする時代からも、さまざまな角度から行われた。研究発表の口火を切った川勝平太（国際日本文化研究センター）の“**Japanese Civilization: Japan's Linkages with the Modern World System, 16th – 20th Centuries**”では、西洋近代との出会いの以前と以後のそれぞれにおいて、日本の経済社会史に顕著な特性の抽出を試みた。エジプトは日本と同時期、あるいはやや先行して、同様の西洋近代との「出会い」を体験し、かなりの面において共通する対応を試みたが、その結果は異なるものとなった。日本とエジプトは、経済・社会的、あるいは政治的・軍事的・地政学的条件において、そして西洋近代への制度面での対応においていかなる相違があったのか、何が双方の近代化の経路の相違を生み出したのか、川勝教授の研究を踏まえた比較研究が望まれることが、ディスカッションで示唆された。続いてムハンマド・サイイド・サリーム（クウェート大学）が、報告“**The Cultural Dimensions of Arab-Japanese Relations with Special Reference to the Japan-Muslim World Dialogue among Civilizations**”で、近年に日本政府が力を入れている「イスラーム諸国との文面間対話」を取り上げて論評した。日本政府の努力を評価しつつ、それが文化という側面に限定され、摩擦や紛争の焦点となっている政治的側面を度外視している、あるいは意図的に避けている点を批判的に指摘した。これは日本の対ムスリム世界の政策に対する、友情に基づく批判となっていた。

牛村圭（国際日本文化研究センター）の報告“**Discourses on and against Civilization in Pre-war Japan**”は、比較文学による言語用法の緻密な分析であり、「文明」という概念が、日本で明治から大正、そして昭和戦前期にかけて用いられてくる間に変遷を遂げ、もっぱ

ら物質的な面に限定されるとみなされる「文明」の概念と、固有の精神的側面の優位性への主張を強く内包する「文化」の概念が、二項対立的に分化していくことを示した。アラブ世界においてこのような「文明」と「文化」の二項対立的な概念文化が見られるのか、ディスカッションで議論が交わされた。第1セッションの締めくくりには、アラブ世界を代表する哲学者の一人であるハサン・ハナフィー（カイロ大学文学部哲学科）が登壇し、“Comparative Value Systems and the Arab-Japanese Dialogue”と題するレクチャーで、刺激的な新説を提示した。ハナフィー教授は、見かけ上の相違が強調されがちなアラブ世界と日本が、価値システムにおいて、根底には数多くの共通性が見出せることを力強く論じた。

第2セッション Comparative Studies in Modernizations between Japan and the Arab World は、園田英弘（国際日本文化研究センター）による“Modernity through Westernization : The Japan’s Case in Comparative Perspective”では、日本とアラブ諸国の「近代化」を比較社会的に研究する可能性が提唱された。園田教授は近代化にとってメルクマールとされる諸要素のうちメリトクラシーに特に注目した。そして、日本の「近代化」が、メリトクラシーという側面では西洋諸国に先行している場合があり、「近代化」と「西洋化」が必ずしも一致しない事例を取り上げた。園田教授はイギリスとの比較を踏まえ、日本が明治期にきわめて短期間に「近代原則」としてのメリトクラシーを導入したと論じた。その上で、アラブ諸国の近代におけるメリトクラシーや階級制度に関する研究を、エジプト側の参加者に呼びかけ、比較研究を行っていくことを呼びかけた。

アラール・アリー・ザイヌルアービディーン（カイロ大学文学部日本語学科）は、報告“Morality and Secularization in Modern Japan: on “*Bushido* Spirits”で、武士道精神の概念の変遷に着目し、19世紀の日本における倫理観と世俗化の形成を論じた。また、ヨムナー・エル＝フリー（カイロ大学文学部哲学科）は、報告“The Beginning of Philosophy of Science in Japan: Comparative Approach”で、近代日本における哲学史を、近代科学をめぐる立場の相違を軸として叙述した。フリー教授は西周や福沢諭吉を中心とした西洋科学哲学の導入を進める流派に着目し、西田幾多郎や田辺元らの、ドイツ哲学の導入に尽くしつつ、仏教哲学に根ざした固有の哲学的伝統を発展させようとした流派と対照・対比させて論じた。それにより、日本の近代哲学史における、経験科学を重視する潮流と、精神的・宗教的哲学を重視する流派の間の相違が、近代／伝統の二項対立と重なる点を論じた。そして、フリー教授は日本の近代哲学史をアラブ世界のそれと比較し、近代／伝統の二項対立図式は、アラブ世界の近代にも見られるものの、アラブ世界においては中世アラブ哲学以来の長期間の科学哲学導入の歴史を見出すことによって、科学哲学と伝統の間のつながりを主張することができた、と論じた。

第3セッションは New Trends in Japanese Studies: Dissemination of Japanese Popular Culture and Representation of Japan in Arab Media と題されて、日本研究の新たな支配的な潮流としてのポピュラー・カルチャー研究の最先端の成果を、エジプトの研究サークルに示すことが意図されていた。諸外国の日本文化に関する研究では、かつては「浮世絵」

「武士道」「茶の湯」「歌舞伎」といった古典的な芸術や芸能側面に特に注目が集まる傾向があったが、近年にはアニメやマンガ、そして大衆文化一般への関心が高まっている。セッションの冒頭では、井上章一（国際日本文化研究センター）が“**Anime and Manga in the World**”と題した講話を行った。いつもながらのユーモアに満ちた軽妙な語り口の中に、鋭い本質的な示唆を含まれており、近年の大衆文化研究の流行に対する批評となっていた。井上教授は自らが各国の友人・知人と語り合ったさまざまな経験を振り返り、日本のアニメやマンガを各地の人々が幼時に享受し、貴重な思い出として記憶し続けてくれることが、きわめてありがたいことであると述べつつ、そのことを日本の美点であるとか、力であるとか、声高に語ることに、本質的な矛盾があり、むしろもっとささやかに、共通の体験としてのアニメやマンガを世界の友人たちと共有するような研究があってよいのではないかと論じた。内省と含羞を込めた井上教授の人柄と学識を示す語りによって、会場は共感で満たされた。

これに続いて、日本のポピュラー・カルチャーを巡る先端的な事例研究が三つ披露された。山田奨治（国際日本文化研究センター）による報告“**Advertisement as a Resource for Japanese Studies**”では、毎年の広告業界の専門家の間で行われるコンペティションで賞を受賞したCMが体系的に分析され、その中で「欧米」を見る見方が時代と共に移り変わっていく様子が例示された。しばしばユーモラスなCM映像に会場はたびたび笑いに包まれたが、同時に、山田准教授によって、CM映像の分析が、日本人の自意識や西洋認識を分析する有用な資料となることが示された。チャワリーン・サウェッタナン（チュラロンコン大学・国際日本文化研究センター客員研究員）の報告「広告文に描かれる日本人女性像」はこれと密接に関係しており、日本のメディアの広告文に見られる女性の表象の研究について、方法論や資料に関する予備的考察を行った。この報告によって、カイロでの研究大会は単に日本とアラブ世界の間での日本研究を巡る交流に限定されないものとなった。この報告は、方法論的な高度さから見ても、言語能力や資料収集能力の優秀さから見ても、アジアの日本研究がいかに進んでいるかを示し、力強い例となった。

これに続いて、さらに会場の驚きと興味を誘ったのは、保坂修司（近畿大学、日本エネルギー研究所中東研究センター）の報告“**Influence of Japanese Anime in Arab Media**”だった。日本におけるアラブのメディア及びインターネット上のアラブ・イスラーム文化の研究の第一人者である保坂教授は、アラビア語のインターネット上で日本のアニメやマンガがどのように受容されているかを、包括的に提示した。日本人研究者が、アラブ諸国の現代のポピュラー・カルチャーを深く探求し、その中に日本のアニメやマンガの影響を発見し、豊富な事例を挙げた。このような試みはアラブ諸国のアラブ文化研究者や日本文化研究者、そして日本の日本文化研究者やアラブ文化研究者のいずれもが、これまでほとんど着手することもできていないものであった。保坂教授の独自の研究の成果に接することができる、貴重な機会となった。

第4セッションは**Studies in Linguistics and Literature**と題し、日本研究の各分野での事例研究が報告された。冒頭の眞嶋亜有（日本学術振興会）の報告「20世紀初期の男性

知識人の身体と『美』を巡る逆説的ディスコース」では、明治期の日本のエリート層の洋行経験に着目し、特に「洋装」や「髭」という身体文化の模倣を取り上げ、それによって日本人エリートたちが中国人移民や日本人労働移民との差別化を図った点を指摘した。そして「文明化」の進展の中での、身体的模倣の流行と衰退の歴史を考察した。

これに続いて、カイロ大学文学部日本学科の最新の成果が次々に紹介された。アフマド・ファトヒー（カイロ大学）による「戦後日本文学における『戦後』は果たして終わったのか」では、「戦後」という言説の成り立ちが解説され、マーヘル・シルビーニー（カイロ大学文学部日本語学科）は「近代日本語における他動詞と自動詞」で、日本語の自動詞と他動詞という概念が日本語文学に適用されることによって生じるさまざまな疑問を問いかけた。アーディル・アミン・サーレフ（カイロ大学文学部日本語学科・大阪外語大学客員教員）は「日本における言語改革モデル：そのエジプト言語状況への意味」で、日本の近代国語の成立の歴史を考察し、それがエジプトに求められる言語改革のモデルとなりうることを論じた。カラム・ハリール（カイロ大学文学部日本語学科、在日本エジプト大使館参事官）の「近代日本文学における自殺」では、日本の文学者や知識人に極めて多く見られる自殺という問題を、現在の日本社会に広がる現象としての自殺と関連づけて、日本文化の大きな問題としてとらえた。イサーム・ハムザ（カイロ大学文学部日本語学科）も活発に討議を行い、会場の理解を深めた。

第5セッションは、Japanese Religiosity in Comparative Perspectives と題されている。ムハンマド・アフィーフィー（カイロ大学文学部歴史学科）の“Observations on the Introduction of Catholicism to Egypt and Japan: A Comparative Approach”では、日本とエジプトのキリスト教受容の相違をもたらした、異なる宗教的な環境と制度を比較考察した。ティモシー・カーン（国際日本文化研究センター）“Syncretism or Alternativization? Some Thoughts on the Reception of Christianity and Religious Trends in Modern Japan”は日本のキリスト教受容の特有なあり方をとらえる適切な概念化についての考察を進めた。池内恵（国際日本文化研究センター）の“Sufism and Islamic Philosophy in the Work of Izutsu Toshihiko: A Japanese Way of Understanding Islam”では、日本のイスラーム教の理解が、特に知識人のそれにおいては、圧倒的に、井筒俊彦の著作を通じてなされていることが指摘された。その上で、スーフイズム（イスラーム神秘主義）とイスラーム哲学に関心を集中させた、井筒に特有のイスラーム理解が、井筒個人の生活史の中でどのように形成されたかを論じた。

今谷明（国際日本文化研究センター）の報告「室町の五山と王権——カイロ・マムルーク朝スルタンとの比較を通じて——」では、禅宗の教学と、室町幕府の権力との関係が、エジプト中世のマムルークのスルタンと、ウラマー（イスラーム学者）との関係と比較して考察された。小島康敬（国際基督教大学）の報告「イスラーム思想と新儒学 朱子学・陽明学・徂徠学——イスラーム思想を参照として——」では、小島教授は池内の発表に応答し、自らもまた、「日本の知識人」であり、井筒俊彦の著作に専ら依拠してイスラームを理解したつもりになっていた、と告白し、ハリール教授の報告になぞらえて「自殺したい」

と冗談を言いつつも、井筒によるイスラーム思想史の分類、すなわち「外面の道」と「内面の道」の分化によって思想史を理解する方法に刺激を受け、同様の分化を東アジアの新儒教の思想の中にも見出そうとした。

本報告書は、上記した日本研究カイロ会議でのさまざまな発表の主要な部分を、会議での議論によって得られた知見を踏まえて改訂し、出版するものである。

本報告書では、会議での寄せられた諸論文を、改めて四つのパートに分類し直した。第1部 **Comparative Studies in Civilizations and Modernities: Japan, the West and the Arab World** では、会議の第1・第2セッションで報告された発表を、議論を踏まえて改訂した諸論文が収録されている。(なお、園田英弘教授の報告については、改訂版の論文を本報告書に収録することは叶わなかった。そのため、このシンポジウムのために事前に提出された **Modernity through Westernization: The Case of Japan** を収録している。日文研の発展のために尽力した園田教授の早過ぎた死に、深く哀悼の意を表したい)。第2部にはカイロ大学文学部日本語学科の教員から寄せられた論文が収められ、第3部 **New Horizons in Popular Culture Studies** では、日本のアニメやマンガについて諸外国で高まる関心を踏まえた研究と、テレビCMを新たな研究の素材として取り上げる試みが収録されている。第4部は **Intellectual History Japan in the Light of Islam** と題され、イスラーム思想の比較によって得られる日本思想史への新たなアプローチや、イスラーム思想との出会いによって生じる日本思想の変化を取り上げた論文を収録し、カイロで開催されたシンポジウムの特色を示すことを意図している。

全ての報告が網羅されているわけではないが、カイロでの日本研究大会を共に準備し、成功させるための過程で得られた知見や、会議に参加し、議論を行った結果として得られた知見によってもたらされた成果ということから、真の意味での「成果」の報告ということができるだろう。一方ではエジプトにおいて行われてきた日本研究の現状での成果と水準を示し、他方では日本側がエジプトとの協力関係や相互の影響関係の中で日本研究を発展させていこうとする試みを伝えるのが本書の目的とするところである。